

松村通信第77号

2012年3月21日
松村勝弘

卒業式シーズンに思う

卒業式のシーズンとなった。最近私が思っていることを書いて、卒業生諸君に送るはなむけの言葉としたい。

ネットワークの重要性 3・11から早や一年を過ぎた。この間、youtubeなどで津波映像をあきず眺めていて、一体これは日本人にとってなんだったのだろうと、考え込んでしまう。重厚そうな家が、押し寄せる津波にいと簡単に流されていく。これは一体何を意味しているのだろうか、考え込んでしまう。

そこで気が付いたのは、家という実物資産がいかにほかないものであるか、ということであった。震災後、「絆」という言葉がもてはやされたのも意味のないことではない。それは、家という実物資産は流されても、人間関係は簡単に流されてしまうものではない、ということである。もちろん、人間関係の難しさは、別途ある。しかし、物的資産をいくら構築してもあまり意味はない。人間関係を構築することの方が意味があると思う。相続においても、家屋敷を残す意味はないと思う。その子に教育をつけ、ネットワークを構築させておけば、これは極めて大きな資産となる。無形資産である。最近これが社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)と呼ばれる場合がある。

卒業生諸君は大学の4年間で、ゼミをはじめ様々なネットワークを構築したと思う。まさにこれは無形資産である。これは何物にも代え難い大きな資産だと思う。利害を離れたつながりである。あるいは、卒業したら立命館大学の校友となるわけであるが、社会で「あなたも立命館大学出身ですか」ということで一気に仲良くなれる。もちろん「松村ゼミ出身ですか」などという場合、もっと親密度は増すであろう。これらは無形資産のなにもでもない。その資産価値は皆さんの力によってさらに大きくすることもできる。おたがいが力を持つようになれば、相乗効果が生まれる。

開かれたネットワークの時代 企業経営でも、今日ハードよりもソフトが重要であるという。今日豊かな社会になって、飽食の時代

だともいう。しかし、心が貧困では寂しい。この時代を生き抜く力、それこそが大きな資産だと思う。もちろん、ハードが無意味というわけではない。ソフトがしっかりしていたら、良いハードも作れる。トヨタ自動車もてはやされたのは、その生産システムであった。それは仕組み、ソフトであった。ただしそこでの仕組みは社内・下請けという閉じたネットワークであった。そこでの緊密な関係がすばらしいハードの源泉であった。それが擦り合わせ技術だ、インテグラル・統合型技術だともてはやされた。今日、モジュール化が進むと、その優位は失われつつあるという。電機産業を見ればそれが明らかだという。サプライ・チェーン・マネジメント SCM という、いわば仕組み、ソフトをうまく構築した Dell だ Apple だとかが優位を構築している。この場合は、どちらかというより開かれたネットワークをうまく活用した事例だろう。

開かれたネットワークの活用は、技術開発などの場合、よくわかる。閉じられた社内ネットワークが技術開発に有用であることは間違いないし、日本企業はこれを活用してきた。しかし、全く新しい発想は、そういった閉じられたネットワークからはなかなか出てきにくい。全く違う世界の人との交流のなかから、全く新しい発想が出てくる可能性がある。とんでもない「気付き」はそういう開かれたネットワークから出てくる。シリコン・バレー、ビット・バレーの場合は半ば開かれたネットワークだが、もっともっと広いネットワークからの方が、全く新しい知見が産み出される可能性が大きいだろう。そういう意味では、常にネットワークを広げるよう心がける必要がある。そういうネットワークから得られる情報の価値は大きい。しかし、情報を得るためには、情報を発信する必要がある。ギブ・アンド・テイクでなければならない。しかも、後で見返りがあるからと言うので付き合いをはじめるとは、相手もつきあいたいとは思わないだろう。ギブありきでなければならない。

「何かの情報がほしい時に、まず自分から情報を提供する。そうすると相互支援の可能性が生まれてくる。しかし、冷静に損得を計算し、投資として他人を助けても、計算した期待値を超えるような多くの収益を引き出すこ

とはできない。見返りを期待せず、ただ単にそれが正しいことだから人を助けるのであれば、それはソーシャル・キャピタルの蓄積となり、計算ずくの等価交換では到底得られない相互支援関係をつくり出すことになる。」(ウェイン・ペーカー『ソーシャル・キャピタル』ダイヤモンド社、2001年、199頁)

これは「利他」という言葉で置き換えることができるかもしれない。

「他力」を考える 寺島実郎『世界を知る力 日本創世編』(PHP新書、2011年)という本を読んだ。3・11以後に感じたことが書かれている。私は共感できる場所が多かった。それは人間がいかに無力かということである。あの津波の映像をみれば誰も感じることではないだろうか。人間の英知には限界があるということである。最近の人間の傲慢さを思い知らせてくれた。防潮堤を作ったら、それで防げる、自然を制覇したという人間の思い上がり(自力主義)を、津波は砕いた。謙虚に人智の限界を知るべきだった。防潮堤に頼らず、裏山に逃げた人は生き延びた。福島第一原発然りである。リスクに立ち向かうのではなく、リスクから目をそらす、そういう人間の弱さが事故を大きくした。人間の限界、弱さを自覚すべきであろう。今回の津波、原発事故は私たち現代の日本人の思い上がりを見事にぶちこわしてくれた。あたかもこれを見通していたかのように、親鸞は他力本願を唱えていた。寺島は言う。

「浄土真宗の説く他力本願とは、概(おおむ)ね次のような意味であろう。

わたしたち衆生の浄土往生は、すべての衆生を救済するという誓い(本願)を達成せんとする阿弥陀仏(他力)の働きによってもたらされるのであって、私たち凡夫のはからい(自力)には左右されない。

けっして、他の人に何か代わってやらしてもらおうという話ではないのである。わたしたち人間は、あくまで阿弥陀仏が彼岸から救済の手を差し伸べるのを待つしかない、そういう限界をもった存在にすぎないという峻厳(しゅんげん)な認識を述べた言葉なのだ。

この認識にたどり着くのは、文字で読むほど容易なことではない。むしろ、自力でとことん努力を積み重ねたうえで、圧倒的な敗北感、挫折感、無常感を体験しないと、本当の意味で理解することはできないのではないだろうか。」(寺島実郎、上掲書より)

ブレーキのない自動車 さらに、最近の日本人が置かれている状況を的確に表した寺島の次の文は、私を引きつけた。

「明治の日本人は、押し寄せる西洋化という怒濤(どとう)のような流れに対し、『和魂洋才(わこんようさい)』で立ち向かった。つまり、技術は洋の才を学んで受け入れるにしても和の魂は見失わないぞと歯を食いしばって魂を保持した。しかし、戦争で敗北し、マッカーサーがやってきて、日本人は『無魂洋才』になった。つまり、魂をなくして洋の才を無条件で讃(たた)えるようになった。そしていま、グローバル・スタンダードなる市場原理の形をまとった一神教的世界観が吹き荒れるなか、日本人は『洋魂洋才』になれと迫られている。

それから十五年あまりが経ち、強欲なマネーゲーム資本主義がリーマン・ショックで破綻するなか、次なる時代にパラダイム転換を起こそうとしているその瞬間に、『3・11』は襲ってきたのである。

五木氏は『他力』という著書のなかで、『魂なきシステム』はブレーキのない自動車のようなもので成立しない、とも語っている。思えば、戦後日本人は、ブレーキを失ったまま、あるいは、自分たちにはしっかりこないブレーキのみに頼って、自動車を運転してきたようなものである。『3・11』によって問われているのは、地震・津波対策原発事故対策といったテクニカルな問題にとどまらない。魂の基軸というブレーキを失った社会のありようこそ問われているのではないだろうか。」

(寺島実郎、上掲書より)

今の政治状況はじつに頼りないが、今、日本はいろいろ考え直す、ある意味、大きなチャンスを与えられていると考えるべきなのである。今や模範とすべき先行モデルはない。自分の頭で考える必要がある。西欧から一方的に学んできた日本が、今改めて、和魂洋才、自分の心を鍛えて、新たなモデルを発信するチャンスを与えられていると考えるべきなのである。金融危機は欧米に先立って経験した。高齢化社会も大きな課題である。エネルギーなど自然と調和した形で開発しなければならない。まさに課題が山積している。そしてその課題に真っ先に突き当たっているのが日本である。まさに課題先進国である。これの解決策を見つけたら、世界の先頭に立つことになる。期待したい。

HPを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP (<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい (matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。

